

第2回 小中一貫教育先進校視察

議事録 要旨

- 1 日時 平成25年7月4日(木)
10:00~11:20 説明・質疑応答
11:20~12:00 施設見学
- 2 視察校 京都大原学院（京都市立大原小中学校）
- 3 参加者 14名
影林保志（生駒北中学校育友会顧問）、正田文敏（打田・高船保護者代表）
藤堂宏子（ひかりが丘自治会会長）、窪田博明（久保自治会顧問）
井上園子（「i どばた会議」共同幹事）、十文字良明（生駒北小学校長）
上西均（生駒北中学校教頭）、柳田富恵（生駒市校園長会長）
富山二郎（生駒北小学校教諭）、武田厚四（生駒北中学校教諭）
事務局（峯島教育総務部長、伊東教育指導課長、藤本教育総務課課長補佐、前田指導主事）
- 4 質疑応答
 - (1) 小規模校なのにテニス部は市内大会で3位という素晴らしい成績だが、部活動はどのように行われているのか。
(回答) 7年生以上が入部する部活動には、ソフトテニス部とバドミントン部といくつかの文化部がある。5年生からは水曜日の30分間と一部土曜日にも活動できる。
 - (2) 少子化や過疎という問題がある中で、どのようにして小中一貫校の設立に至ったのか。
(回答) 小学校は統合、中学校はバスで他校に通学することが明らかになり、地域に学校がなくなるという危機感が住民に広まった。そこで地域の人たちは教育委員会に行き、存続を訴えた。教育委員会は「小中一貫校になれば存続可能である」という回答だった。そこで全国の小中一貫校を調べ、児童生徒数の減少で一貫校になった奈良市田原小中学校に学び、設立に向けて動き出す。今、大原学院では0歳から15歳まで100人が集う。
 - (3) 4・3・2制のブロック制を実施し、あらかじめ想定していなかった事態は発生しなかったか。
(回答) 今までは6年生が学校のリーダーだったが、4年生にリーダーとしての自覚が出てきた。3年生にも「来年は自分たちが」という意識がある。6年生については運動会での応援リーダーをさせたり5年生から9年生までの委員会活動で頑張らせたりするなど、「6年生=小学校のリーダー」というこれまでの名残を意図的に残している。中期ブロック(5年生~7年生)の指導が難しかった。

(4) コミュニティ・スクールとしての新たな課題は見つかったか。

(回答) 課題ではないが、コミュニティ・スクールとしての機能を果たすべく組織面でも充実してきた。学校が運営について決定し、それを地域が協力するという、従来よくあるような関係ではない。地域住民は「学校に自分たちがいろいろ言っていくことで、学校は変わっていくんだ」という意識を持っている。例えば大原学院には地域が雇用したALTがいる。1年生から英語教育をするためである。このように地元からの寄付をどう使うかについて地域住民の思いを取り入れている。修学旅行や部活動の対外試合でのバス借り上げ代金の補助など。

(5) 子どもの数に対して先生の人数が多いように感じるがどうしてなのか。

(回答) 子どもの数ではなく学級数で先生の人数は決まる。1学級8人未満なら複式学級となるが、複式学級にならないよう、児童生徒数が6人の学級には講師が加配されている。小学校は学級担任6人+教務主任1人+教頭1人の合計8人、中学校は1教科1人だが、英語と数学の教員を加配されて2人ずついる。音楽や美術、技術家庭は非常勤講師である。養護教諭は今年から1人になった。

(6) 昭和62,3年までは生徒数が増加、その後は減少に転じているが、減少の勢いが激しいのは何か理由があるのか。生駒でも生徒数減少を受けて一貫校の協議が始まった。一貫校が魅力あるものとなり地域の活性化につながれば、結果として人口増・生徒増につながると期待している。大原では一貫校が始まりまだ5年で成果を求めるのは早いと思うが、何か成果は出てきているか。

(回答) 大原は市街化調整区域となっており、そのために人口が増えない。ここで育った子供が大人になってもここで住むことになれば子どもの数が増える。そのために特色ある学校、魅力ある学校になればいいのではないかと思っている。御所南小学校がそうだった。今、大原では自治会が中心となり地域の人口を増やす取組である「さとづくりプラン」の実施を市に陳情している。「地域のための学校」「学校がなくなれば地域が廃れる」、そんな思いが地域にはいつもある。数年後、小中一貫校の成果が目に見える形で現れれば、人口も増えるだろう。しかしながら少人数指導、いきとどいた指導が大原学院の特徴だから、生徒数は「微増」がいい。奈良教育大学の小柳教授がそう述べられた(訪問前日に大原学院は奈良教育大学と連携協定を結んでいる)。成果が出るのは10年後ぐらいかもしれない。

(7) 特例措置の申請を行う必要があるものはなかったのか。

(回答) 教育課程の変更はしていないので申請は行っていない。一年生からの英語授業は授業時数にカウントしない授業であり、5年生や6年生は1授業時間が45分ではなく50分だが、「補充の時間」としている。

(8) 指定校の変更によって入学してきている例はあるか。

(回答) ない。

(9) ノーチャイムで困ることはないか。

(回答) チャイムが鳴らないことで混乱はない。給食開始時間が前期・中期・後期ブロックでずれているが、

前期ブロックの1~4年生は給食準備や食事に時間がかかるので、給食終了は大方3ブロックで同じ時刻になる。チャイムは午前と午後の授業開始時に鳴るだけである。チャイムが鳴らないことにより、子どもたちは時計を見て動くようになった。昼休みの運動場では、誰かが昼休みの終了時刻が迫って教室に戻りかけると、他の子どもも気づいて遊びをやめる。慣れるのが一番遅かったのが教師だった。

(10) 給食調理員が1名しかいないが、自校式で調理しているのか。

(回答) 急に休んだときのことを考え、プール要員として1人を登録している。児童生徒数120~130人までは給食調理員は1名しか雇用できない。

(11) 特別支援教員の配置はどうなっているのか。

(回答) 特別支援の教員は、児童生徒8人に1人であるが、1年生から9年生までの合計ではなく、あくまで小学校単位、中学校単位でカウントする。

(12) 中学校の教員が専門分野を生かして小学校で授業をすることは多大な効果があると考えている。しかしながら、教員の中には中学校3学年分の授業を行い、なおかつ小学校の授業もしなければならない者もいる。負担になってはいないか。

(回答) 中学校の教諭はベテランが多く、仕事の見通しを持ってやっている。教職員の負担と教育的効果のバランスを考えることが大事である。中学校教師の専門的視点で小学校の子どもを教えるのは効果的だと思う。

(13) 中期ブロック(5~7年生)の授業に中学校の教師が入るときの指導体制や中期ブロックの指導の難しさについて教えていただきたい。

(回答) 中学の先生が教えるときには小学校の教師はT2(教師が複数で授業を行う時、主として全体指導をするのがT1。T2は個別指導等授業の補助をする。)として入る。小学校は單元ごとのテストをするが、7年生からは中間・期末テストを行う。6年生の卒業式は卒業証書をもらう式だという認識でいる。普通なら中学1年生である7年生は中学校で一番年下としてリーダーの上級生についていく立場なのだが、7年生がリーダーとしての自覚を大いに持っているように感じる。そう考えると3ブロック制では中学卒業までに3回、リーダー性を高められる時期がある。ここでは9年生は0歳から15歳までのリーダーである。だから大人を目線で、大人で物事をとらえて判断する。

(14) 少人数という限られた人間関係で9年間を過ごすことについての保護者の心配があるが、少人数で過ごす利点は何か。

(回答) 家庭的雰囲気なのがいい。生徒指導上の問題は起こった場所・起こった時に解決するようにしている。人数が多い学校ではリーダーにならない子どもが出てくるが、少人数だと全員がリーダーにならなくてはいけない。しかし、これをやりきると自信がつく。子どもたちは高校生になって初めて小集団を離れるが、高校を途中でやめる子はいない。

5 事務連絡（事務局）

○懇話会の議事録については、今後、参加者に目を通してもらってからホームページに掲載する。

○井上園子氏が就学前の保護者の声を集める「i どばた会議」の共同幹事として懇話会参加者に加わること
の了解を得た。